

トマス・ハーディ詩集

古川隆夫 訳

桐原書店

訳者略歴（筆名 岡隆夫）一九三八年岡山県生まれ。

著書 『エ、リイ・ディキンスの技法』文部省研究成

果刊行図書、日本図書館協会選定図書、桐原書店、

一九八〇。

以下筆名による詩集、『詩情への訣別』一九六一、

『山の爪』一九六五、『銀葉アカノア』一九六八、

『アノチ・デモクラシー』一九七〇、『追う』一九七

五、『病める水仙』一九七八。

訳詩集 筆名、『エミリー・ディキンスノ詩集』日本図書

館協会選定図書、桐原書店、一九七八年十一月初

版、一九七九年四月再版。一九八〇年二月第三版。

編著 『エ、リイ・ディキンスノ解釈総索引・国外篇』

桐原書店、一九七九年十月（全英文）。

『同・国内篇』同、十二月。

編注 『エ、リイ・ディキンスノ詩選』（全英文）、岡山

英文学会発行、一九七八。

『デアトラの悲話』（共注）、文理、一九七七。そ

の他。

現職 岡山大学文学部助教授（日本現代詩人协会会员、

『火片』『詩脈』同人、日本イエノ協会、日本ハー

ディ協会、日本エ、リイ・ディキンスノ協会等会

員）。

現住所 〒719-02 岡山県浅口市郡鳴方町六条院東一〇五九

トマス・ハーディ詩集

定価三、二〇〇円

一九八一年八月一〇日 初版発行

訳者 古川 隆 夫

発行者 山崎 賢 二

発行所 株式会社 桐原書店

東京都杉並区阿佐谷南三ノ四ノ二二

電話（〇三）三九二・五一二一

振替 東京六〇五五二四四 千六六

印刷所 カンヨ印刷株式会社

©1981 Takao Furukawa

カハーデザイン ゼンタグラフィック

トマス・ハーディ詩集

古川隆夫 訳

はじめに

トマス・ハーディの詩の魅力は、その明晰さと曖昧さの混淆にあると思われる。勿論、彼の多様な思想性と豊かな感情が、その内容を豊かにしていることは言うまでもない。ハーディは、単に伝統的詩型によって日常的素材をわかりやすく明瞭に歌いあげた、過度期の抒情詩人にすぎない、と思っ**て**いては、その詩の魅力は半減しよう。その作品は、意外に謎めき、変化に満ち、驚異と不思議と曖昧さを内包している。

ハーディの詩が再評価されはじめたというのは、小さな評価の波は別として、当を得ていない。数年前から始まった本格的な研究に比べると、それ以前のものは、趣向に偏した紹介の域を脱して**い**なかつたといつても過言ではない。彼の詩の詳細な研究と大きな視野からなされる評価は、これからだといつてもよい。ちなみに、いま原典関係にのみしぼってみよう。ギブソン編『トマス・ハーディ全詩集』ニュー・ウェセノクス版一九七六年（この訳詩集はこの版による）、『折々の幻想』ファクンミリ版一九七八年、それにギブソン編『トマス・ハーディ全詩集・集注版』ヴェアノフムが出されたのは、つい先般一九七九年の秋で

あった。このことからしても、右のことは頷けよう。

今回私は、そうしたテクストはもとより、ヘイリイ、ピニオン、シートロウ、ハインズ等々の研究書を参考に資しながら、これまでにあまり、読まれなかったり、紹介されなかった佳作を読み、それらを訳してみようと思い立った。特に、八冊の詩集中かなり評価の高い第五詩集『折々の幻想』を全訳しようと思ったが、さほど秀れているとも思えないものもあって、結局、その三分二弱の作品を訳し、第一部とした。そして、削除した作品を埋め合わせるべく、他の七冊の詩集から、特に重要で秀れた作品と思われるものを選び、第二部とした。従って、よく知られたハーディの詩は、この第二部に多く見られる。

この詩集が単なる訳詩集にとどまらないよう、私の解釈をもまじえ、諸家の主要な解説や解釈を加え、且つこの訳詩集の作品と直接かわる内外の文献および研究の手引をも盛りこみ、今後の研究の一助になるよう配慮した。こうした盛沢山の本書を快く引き受けて下さった桐原書店社長山崎賢二氏に心から感謝の意を表したい。

一九八一年四月十日

古川 隆 夫

目次

はじめに 3

第一部 『折々の幻想』より

* ()内は作品番号

折々の幻想 (352)	12	玄関先にて (478)	33
へきよならゝといったとき (360)	14	今か今かと (373)	34
歌——モノノアルトの楽章によせて (388) ..	16	汝ここにて何をなすや (371)	40
窓辺にすわり (355)	18	系図 (390)	46
心変わり (384)	20	父のヴァイオリン (381)	49
ラニヴィット附近 一八七二年 (366)	23	在りし日の讚美歌への呼びかけ (359)	53
おまえは忘れられる女だった (364)	26	古寺院建築様式模写 (369)	56
歳月の時計 (481)	28	シェイクスピアに (370)	59
岩におちる影 (483)	31	メイフェアーでの宿泊 (380)	62

盲にされた小鳥 (375)	65	最後の合図 (412)	95
庭園にて (484)	67	暖炉の薪 (433)	97
問題のお祭りちわわ (398)	68	五人の書生 (439)	98
或る咎め (486)	69	記念日 (407)	101
かれの心 (391)	71	スタウアー川を眺め (424)	103
教区委員の青年 (386)	74	オルゴール (425)	105
ある記念日に写真を見る (488)	76	スターミンスター歩道橋にて (426)	108
むかしの道 (480)	79	おせっかや (432)	109
ピアノのそばで (482)	81	日傘 (434)	112
過ぎし日の遠出 (472)	83	風の予言 (440)	114
昔のすみか (392)	85	風雨のさなか (441)	117
窓を打 (396)	86	すてきなもの (414)	119
写真 (405)	88	牛たち (403)	122
変身 (410)	90	かごのひわ (436)	124
荒野にて (406)	92	夏の感じはさらになし (456)	125
彼女の領域にて (411)	93	彼はこの世の彼女を慈しむ (442)	126

今は亡きモリー (444)	127	聖歌隊長の埋葬 (489)	165
おそい春 (445)	130	ふと何かに救われて (475)	169
海辺の町にて——一八六九年—— (447)	131	夢想 (477)	172
一瞥 (448)	136	新婚の宿 (466)	174
ある国のお祭り (451)	138	敵の肖像画 (476)	178
真鍮記念牌・一八六—— (452)	140	古い家具 (428)	181
歩行者 (449)	142	愛の独占者 (420)	184
詩篇第百 (461)	145	二月の野中の門柱 (421)	187
だれかが隣の部屋に (450)	148	最後の演奏 (430)	188
訪問 (454)	150	塔の上の人 (431)	190
白樺残葉 (455)	151	行軍する兵士たち (493)	192
吾を疑う (460)	153	故郷 (494)	195
広い西部の真夜中 (465)	154	遺憾千万 (498)	197
待合室にて (470)	156	行軍のあとさき (502)	199
断章 (464)	160	戦時中の大晦日 (507)	201
ネジを巻く男 (471)	162	筆をやすめ 私は見上げた (509)	203

戦のさなか (503)	206
ある男との出会い (508)	207

第二部 抒情詩篇

墓にふる雨 (280)	216
旅のあと (289)	219
ボッタル城にて (292)	221
夢か否か (288)	224
フィーナへの想い (38)	227
街灯のはずれ (257)	229
女旅職人の悲劇 (153)	232
行く必要はなかるうた (102)	241
たそがれのつぐみ (119)	244
中間色 (9)	246
逝去 (277)	248
みどりの瓦 (678)	251

国破れて (500)	211
死後 (511)	212

幻の女性騎手 (294)	253
ある男がわたしに近づく (536)	256
闇の底 I (136)	259
亡霊 (284)	261
別れのプラットフォーム (170)	264
声 (285)	266
不運な出来事 (539)	267
かの地で彼女を見出した (281)	272
訪問後 (250)	276
古く上着 (541)	278
凍った温室 (706)	280
彼女は扉をひらいてくれた (740)	282

不滅の女 (32)	284	教会でのロマンス (211)	304
あの月をしめ出せ (164)	289	吾れ知らず (135)	306
今は亡き友人たち (36)	291	十一月の夜 (542)	307
幻の世界をさまよう (5)	294	ピクニックの跡 (297)	308
鏡をのぞき (52)	296	ある顔つき (847)	311
出会へ (271)	297	似て非なる—— (762)	312
ライオネスに旅立ちの日 (254)	298	羊歯のなかの幼年時代 (846)	313
居直り (13)	300	クリスマス・一九二四 (904)	315
ローマ街道 (218)	301	宿命論者の碑文 (877)	316
老女たち (111)	303		

註と解釈	317	ハーディの作品一覧	439
参考文献 (国内篇)	366	作品番号順索引	441
研究への手引 (国内篇)	377	原詩題名索引	445
研究への手引 (国外篇)	418		
ハーディ略歴	419		
参考文献 (国外篇)	438		

第一部 『折々の幻想』より

折々の幻想^{いふ}

カガミよ

われらを透明にするものよ

一体だれか カガミを手にし

われらの赤裸な胸のうちの光景を

眺めるように 命ずるのか

カカミよ

おまえの魔力は投げ矢のようにしみ透る――

だが だれがカカミを手にとって

われらの想いを われらの心を 己れ自身にふり向かせ

これほどまでに脅かすのか

そのカガミは

心の痛むこんな夜ふけはよく映る――

だがそのカガミには

この世が覚めているときには決して見られない色彩が

現われるのはなぜなのか

そのカガミは

気づかぬうちに人を試す――

そう その不思議なカガミは

人のすべての想いを 美醜をとわず全人生を とらえて映す

だがそれは 一体どこに？

Moments of Vision (352)

へさよなら」といったとき

彼女は　ちょうど雲間をぬけて

しめっぽい芝生の上に降りたつた小鳥のように
ただひとり額をあげて　早朝の

ほの暗さのなかを歩き来した――

ぼくの別れの朝食にと

部屋にともされたロースクは

戸外のすべてのものをおぼろげに　奇妙にも

影のように　空なものに思わせた

時・それ自体まぼろしだった

再び彼女に会える機会など

当時のぼくには

ほとんど皆無に思われた

すべては夢幻のこの世にあって

生れたときから二人の出会いを支配した

過・去・の・計・略・が　この後に及び　ついに

作用していようとは　及びもつかぬことだった

あのとき　あるドラマへの

序曲があつたのも読みとれず

運命は　あれほど些細な端緒から

どんなことを目論むのかも予測しえず

ぼくはただそうせざるをえない

ある必然に迫られたかのように立ち上り

薄闇になお一人立つ彼女の方へと

窓越しに踏みだした――

へもうお別れです　さよなら／＼　ぼくはいった